

土木学会 100 周年おめでとうございます。磯部雅彦会長、小野武彦前々会長、橋本鋼太郎前会長、そして藤野陽三 100 周年事業実行委員長をはじめとして、準備に当たってこられた方々のご苦勞が実って、このような素晴らしい、かつ盛大な 100 周年の祝賀を迎えられたことを、日本学術会議を代表して、お祝い申し上げます。

また、この 100 周年を、社会貢献、国際貢献、市民交流、さらに社会安全に焦点を当てて事業を行う年として、全国で活動されてきたと伺い、その前向きな姿勢に深い感銘を受けました。

私ども日本学術会議は、戦後発足の新しい組織ですが、その前身とされる学術研究会議は、1920 年に設立されました。そして初代会長には、土木学会の初代会長を務めた古市公威先生が就任しました。また、1949 年発足の日本学術会議の第 1 期会員の中には、土木学会の第 33 代会長の田中豊先生が第 5 部会員として含まれています。このように、土木学会は、日本の学術界においても中心的な存在で、その形成とともに、諸活動をリードしてきたといえます。

こうした歴史を継承し、現在でも土木分野の皆さんは、日本学術会議の活動において重要な役割を果たしています。特に、東日本大震災後には、復興支援のために他の学協会とともに、「東日本大震災の総合対応に関する学協会連絡会」を創設し、継続的なシンポジウムや提言活動をされています。集まった学協会は 30 に及び、学際的な活動のモデルとなっています。また、ご承知のように防災分野では、来年仙台で、第 3 回国連世界防災会議が開催されます。日本学術会議は、この会議を主催する国連組織である UNISDR らとともに、会議の成功のために準備を行っており、来年 1 月には、科学技術の観点から防災・減災に取り組むために、東京大学で「防災・減災に関する国際研究のための東京会議」を開催します。この会議の準備の中心となっただいただいているのも土木学会のメンバーです。

防災と土木は切っても切れない関係にあるだけに、われわれは大きな災害に見舞われるたびに、土木技術の一層の向上を願うこととなりますが、まさにそのことを実践するべく、土木学会メンバーの研究者の方々が日本学術会議の中で活動されていることを心強く感じています。

土木工学は、市民の工学とも言われます。生活に身近な空間を、安全に、快適に、便利に、あるいは健康的に整えるのが、その目的だからであります。そこには先端的な科学技術が活かされなければなりません。同時に、市民の工学として、市民の合意をベースに適用されるべき科学技術ともいえます。合意形成論や、あるいは土木構造物そのものが市民に親しまれるためのデザインの向上や、それを取り巻く景観の整備といった分野にも多くの研究者が育っていることは、土木工学の市民社会に根ざした発展のために喜ばしいことと思います。

日本社会は、これから、人口の急速な減少という未体験の時代に入ります。その中では、より少ない人数で、国土を管理する技術、様々な災害予測をもとに、より安全な場所

に集約して居住する技術など、新たな技術の開拓が求められます。その意味では、今後の日本社会が土木学会に期待するものはますます大きくなるといえます。100周年を一つの節目として、土木学会がさらに発展し、市民社会の期待に応えていくことを祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

2014年11月21日 日本学術会議会長 大西 隆